

2010年 5月 10日現在

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007年～2010年

課題番号：19202023

研究課題名（和文） 脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究

研究課題名（英文） Studies on "Colonial Responsibilities" in the History of Decolonization

研究代表者

永原 陽子 (NAGAHARA Yoko)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：90172551

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：植民地責任、脱植民地化、戦争責任、人道に対する罪、奴隷貿易

1. 研究計画の概要

「植民地責任」概念を中心に据えて、西欧諸国の植民地であった地域の脱植民地化の歴史過程を植民地・宗主国の双方向的関係の中で比較史的に分析し、脱植民地化についての新しい理解を提示するとともに、歴史学における「植民地責任」研究の手法を開発し、その概念を確立することを目指す。そのために、(1)「植民地責任」をめぐる謝罪・補償の要求の事例の分析、(2)(1)の動きの背景にある法的および歴史認識上の枠組みの分析、(3)(1)(2)の前提となる脱植民地化の諸局面の歴史的分析、(4)諸地域における多面的な「植民地責任」論の検討、(5)「植民地責任」論から大規模暴力犯罪論への発展の可能性の検討、を行う。

上記テーマについて、研究分担者・連携研究者の現地調査を含む研究を進め、研究会形式で報告・検討するとともに、公開シンポジウムや出版の形でその成果を発信する。

2. 研究の進捗状況

(1)(2)の主題については、第2年度までに8回の研究会をもち、9件の事例に即して検討を行った。(3)の主題にかんしては第3年度に2回の研究会での4つの事例をつうじて重点的に検討し、植民地化と脱植民地化における国際的契機を明らかにした。以上の中で、(4)の主題があわせて検討され、旧植民地地域においてコロニアルな課題とポストコロニアルな課題が重畳する形で「植民地責任」論が顕在化する構造を明らかにしてきた。

以上の研究を進めるにあたり、研究分担者・連携研究者により、東欧（チェコ・ポーランド等）、フランス、ドイツ、イギリス、

ポルトガル、ナミビア、モザンビーク、エチオピア、ガーナ、フィリピン等での現地調査を行った。

これまでの研究成果を研究者コミュニティおよび一般市民に公開するために、第2年度には、公開ワークショップ「奴隷制・植民地主義の「罪」をめぐる経験・記憶・償い」を、第3年度には、下記に言及する成果論集の公開書評会および公開国際シンポジウム「脱植民地化研究の最前線：植民地責任論からのアプローチ」を開催した。

第2年度末には、これまでの成果を『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史』（青木書店、2008年）として出版し、本研究の提唱する「植民地責任」概念による脱植民地化研究の成果をまとめた形で提示した。同書は、ヨーロッパおよびアジアの植民地史、アフリカ史、南北アメリカ史等、幅広い分野の研究者コミュニティから予想以上の反響を得て、刊行から1年あまりの間に3刷まで版を重ね、『歴史学研究』誌上で2度わたり書評特集が組まれるなどした。本研究の前身となる科研費課題（『植民地責任』論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究）で試論的に提唱し、本課題で発展させてきた「植民地責任論」は、歴史学研究の場で受け入れられ、市民権を得るに至っている。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

当初掲げた5点の研究テーマのうち、4点目までについて検討が進み、とくにアジアにかんする分析において計画以上の対象を扱うことができた。当初の計画どおりの研究会・現地調査を進めたことに加え、公開ワー

クシヨップ・シンポジウムによる成果公開も行われた。とくに前掲成果論集の刊行により、予想を上回る反響を得て、研究者コミュニティからのフィードバックを得たことにより、扱う事例も広がり、分析視角も多様化し、論点を深めることができた。

4. 今後の研究の推進方策

2010年度は最終年度にあたるため、研究成果を取りまとめる方向で、残る海外調査を進めながら研究会を進める。20世紀の国際関係史の中での「植民地責任」の生成とその回避の仕組みとのせめぎあいの関係として明らかにすることを中心に研究課題全体をとりまとめることとし、各分担者・連携研究者が個別論文を発表するとともに、最終報告書にまとめる。なお、そのさいには、成果を共著として出版することを前提とする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 36 件)

粟屋利江、インド近代史研究と「植民地責任」論、『歴史学研究』865号、査読無、2010、45-59頁。

前川一郎、「歴史学としての植民地責任」、『創価大学人文論集』第20号、査読無、2008年、5-24頁。

http://ci.nii.ac.jp/els/110007144600.pdf?id=ART0009088526&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1274337545&cp=

網中昭世、ポルトガル植民地支配とモザンビーク南部における移民労働ーポルトガル・南アフリカ政府間協定締結の過程(1901-1928)ー、『歴史学研究』832号、査読有、2007年、19-34頁。

〔学会発表〕(計 34 件)

永原陽子、植民地戦争の記憶とヨーロッパにおける歴史認識、日本西洋史学会第59回大会(招待講演)、2009年6月13-14日、専修大学。

今泉裕美子、日本の南洋群島政策と「南洋移民」ー1930年代後半を中心にー、日本国際政治学会2008年度研究大会「日本移民研究の再考」部会、2008年10月24日、つくば国際会議場。

〔図書〕(計 33 件)

永原陽子(編・著)、『「植民地責任」論ー脱植民地化の比較史』、青木書店、2009年、427+x頁。

清水正義、『戦争責任とは何か』、かもがわ出版、2008年、223頁。